

O46-1 一般口演46 画像診断2

頸静脈逆流:単純MRIによる動静脈シャント疾患との鑑別

高橋 慶彦 (翠清会梶川病院 放射線部)

Close

【背景・目的】 健常人において頭部MRAで左硬膜静脈洞内に高信号を認めることがあり、硬膜動静脈瘻などの動静脈シャント疾患との鑑別を要することがある。頸静脈逆流症 (Jugular venous reflux: JVR) は左腕頭静脈が胸骨と大動脈弓によって圧迫されるために左内頸静脈へ逆流することにより生じる。JVRとシャント疾患との鑑別は単純MRIのみでは必ずしも容易ではなく、造影検査を要することもある。今回は造影剤を用いることなく、MRIで頸静脈逆流症とシャント疾患を鑑別することを目的とした。【方法】 左腕頭静脈の圧迫を軽減するための体位として、MRI撮影時に両側の肩甲骨下に肩枕を挿入し肩甲骨を前方に押し出すことで間接的に胸骨を前方に持ち上げた。通常の体位で撮像した頭部MRAで左硬膜静脈洞内に高信号を認め、動静脈シャントを有していないと診断のついている14名を対象に対して、肩枕を使用した上記方法でMRAを撮像し、肩枕の有り・無しでの比較を行った。【結果】 8名で静脈洞内の血流信号が消失、3名で血流信号が減少、3名で変化なしとなった。【考察】 体位を工夫するだけの簡便な方法で多くは頸静脈逆流が消失もしくは軽減し、MRIで頸静脈逆流症と診断を行うことができた。一方で、硬膜静脈洞内の高信号が消失しなかった事例もあり、更なる検討も必要と考えられる。